

歴史と文化における富士山

富士山は日本で最も標高が高く、最も崇拝されている山です。高さ 3,776m で、生まれてから 1 万年経つ、その円錐形の容姿が象徴的な山はその周辺を見下ろすようにそびえ立っています。地質学的には富士山はまだ若い活火山です。最近では 864 年の貞観大噴火がこの地域全体の地形を変えてしまい、富士五湖と青木ヶ原樹海の下に広がる大地の双方を生み出しました。そのため富士山の破壊力に対しては人々は恐怖と畏敬の念を抱きましたが、それでも富士山は長きにわたって守護者と庇護者と考えられています。遺跡は富士山が縄文時代（紀元前 10,000～300 年）から崇拝されていたことを示しており、7 世紀に編纂された日本に現存する最古の和歌集、万葉集にも富士山を称える和歌が納められています。

火山活動は 12 世紀までには、鎮静化し、富士山は、厳しい身体訓練が悟りへの道だと考えていた仏教の宗派、修験道の修験者の修行の場として使われるようになっていました。これらは、17 世紀に成立した富士山を信仰する民間信仰のひとつ、富士講信仰の先駆けでした。数千人という富士講巡礼者が毎夏富士山に押し寄せ、宿、精神的指導者や荷役労働者などの現地の経済の繁栄を支えていました。今日でも富士山の斜面には読経しながら登山する富士講巡礼者を見ることができます。

江戸時代（1603-1868）には、浮世絵の人気の高まり、富士山は人気の高い主題でした。北斎や広重などの浮世絵師は、全方向から富士山の姿を描いて大成功を収め、これらの作品は最終的にはヨーロッパにたどり着きました。葛飾北斎の神奈川沖浪裏は、その時代の日本芸術の作品の中で最も有名な作品と言えるでしょう。この作品は実際には葛飾北斎の「富嶽三十六景」に収録された 1 枚で、波の中央には遠くに富士山を見ることができます。

富士山は、近代化と世俗的な観光によりさらに有名になりました。1895 年にイギリス生まれのハリー・スチュアート・ホイットワースは、この地域に「東洋のスイス」というニックネームを付けて精進湖の向こう側に富士山を一望できる西洋式のホテルを開業しました。1964 年には富士山五合目（標高 2,305m）への有料道路とバス便が開通し、全国、そして世界中から集まる何百万人という登山者がその技能のレベルを問わず標高 3,776m の山頂に登頂できるようになりました。

2013 年、ユネスコは富士山を「信仰の対象と芸術の源泉」として世界遺産に登録しました。登録対象となったのは、日本の歴史と文化における富士山の大きな影響力を示す 25 の構成資産です。ユネスコの認定を受け、来訪者は富士山の裾野やその周辺地域の魅力を再発見し始めました。かつては毎年夏になると巡礼者であふれかえった神社や住居に行ってみたり、富士五湖でのカヌー漕ぎや釣りをしたりしてみるなど、富士山の見えるところで過ごした時間は、山頂への苦しい登山と同様に思い出に残るでしょう。

